

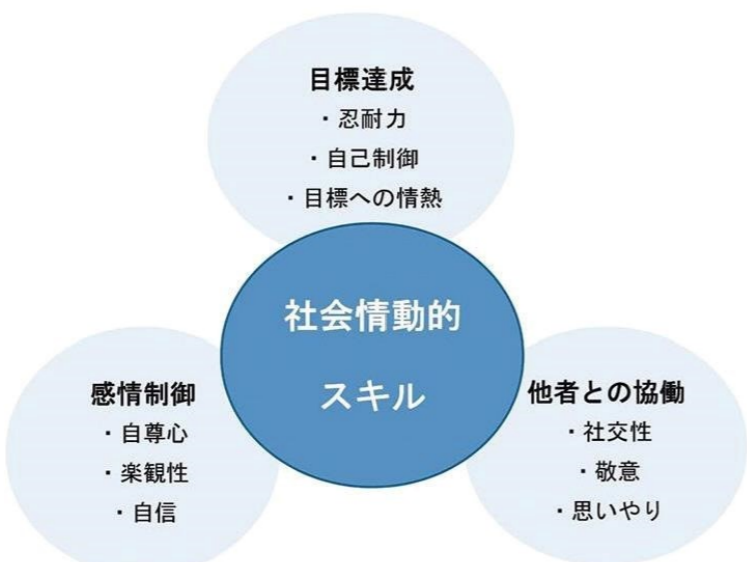
子どもの生きる力を育むには

今、幼児教育や保育の領域では、子どもの非認知能力を育むことの重要性が強調されています。非認知能力は、読み、書き、計算といった目に見え、数値化できるような認知能力と対比的に用いられません。OECDはこの非認知能力を社会情動的スキルとし、目標達成、感情制御、他者との協働などからなるとしています。

これらは心理学の領域では以前からパーソナリティの研究で扱われてきたものですが、教育や保育の領域で、あらためて能力、スキルとして注目されているのです。この非認知能力は子どもが将来、学業や仕事などにおいて成功するための力ギとなるとされています。つまり子どもの生

埼玉県立大学教授 越智 幸一

きる力となるのです。では、この非認知能力を育むためにはどうすればよいのでしょうか。その答えは子どもの遊びにあります。子どもたちの遊びのびびと主体的に夢中になって遊ぶことが大切なのです。子どもが遊びにのめりこむ状態を「遊び込む」と呼ぶことがあります。まさに遊びに集中し、遊びに入り込んだ状態です。



OECD(2015). SKILLS FOR SOCIAL PROGRESS: THE POWER OF SOCIAL AND EMOTIONAL SKILLS

温かい声かけが大切

ここで大切なのが親や保育者、教師の役割です。まず子どもが夢中になって遊ぶことができるような環境を用意してあげることが大切です。といっても非認知能力を伸ばすための特別な遊びがあるわけではなく、なわとび、お手玉、こま回しなど昔からある遊びでよいのです。こうした遊びを子どもが一人で、あるいはお友だちと一緒に夢中になって楽しむことが大切なのです。この環境設定に加えてもう一つ大切なことは、大人たちの受容的な関わりです。夢中になって遊んでいる子どもに「すごいね」「がんばったね」と温かい声をかけてあげましょう。子どもたちは大人のこうした声かけによって自信がついたり、次も頑張ろうと思ったりするのです。

そして、ときには子どもたちだけではなく、ぜひまわりの大人たちも一緒に遊びを楽しんでください。大人たちが一緒に遊んでくれることで子どもたちは安心感を抱き、さまざまな遊びに夢中になれるのです。



<51>